



TITLE:

中國先史時代研究の展望

AUTHOR(S):

水野, 清一

CITATION:

水野, 清一. 中國先史時代研究の展望. 東洋史研究 1957, 16(3): 219-326

ISSUE DATE:

1957-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/148083>

RIGHT:

東洋史研究

第十六卷 第三號 昭和三十二年十一月發行

中國先史時代研究の展望

水 野 清 一

一 は し が き

研究の回顧 中國の先史時代研究は、すでに半世紀をこえることになった。はじめは中國周邊の研究にすぎなかつたが、つきには中國内部の、しかしかぎられた土地の研究になつた。しかし、いまでは中國全土にわたる大規模な研究がくりひろげられている。また研究者も、最初はみんな外國人であつたが、つきには少數ながら中國人になつた。しかし、現在では多數の、それもひじょうに多數の中國人が研究に従事している。中國の廣大な土地で、多數の中國學者によつて大規模な發掘が展開され、めずらしい發見がかなねられているのはよろこばしい。まことにこの半世紀間の進歩は絶大である。

その間、一九二一年、遼寧省錦西沙鍋屯と河南省滎池仰韶村でアンデルソン博士が仰韶文化を發見したことが、一九三〇—三一年、山東省歷城龍山鎮城子崖で中央研究院が龍山文化を發見したことは、二つの劃期的な事件であつた。そして、その背後には諸學者による殷周文化の研究があつた。殷周文化の研究は金石學者古代史學家および考古學者たちによつて、たえず、すすめられつつあつたが、とくに一九二八年(民國十七年)以來、中央研究院がおこなつた安陽殷墟の發掘は、董作賓氏の斷代研究をうんで面目を一新した。中國の先史時代研究は、殷周文化を出發點として仰韶文化と龍山文

化との關係を中心に展開されてきた。このことは、現在でもまだそのとおりである。

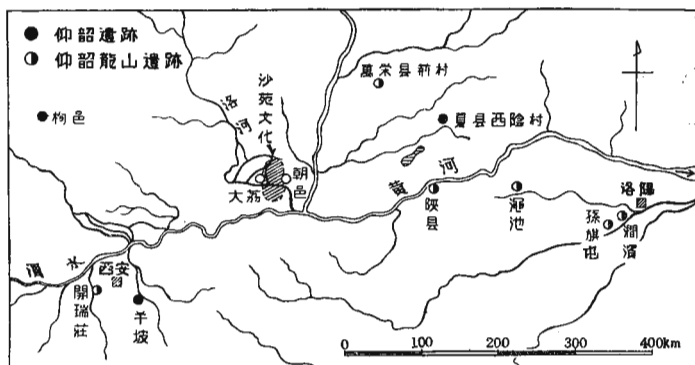
研究の現状 しかし、それにしても解放後の情勢は、まづたく事情が一變してしまつた。大規模な建設工事とこれにもなう調査發掘が、夜を日についであたらしい事實を地中から掘りだしている。われわれは、これらの新事實の應接にいとまがなく、いささか呆然としているかつかうである。だから、これをいくら整理しようという努力も、すでにあらわれている。たとえば、尹達氏の『中國新石器時代』（北京一九五五年刊）は、論文をあつめたものではあるけれども、中國新石器時代の大綱を知るようにできている。安志敏氏の「中國新石器時代的物質文化」（文物參考資料、一九五五—八、四一—四九頁）と、佟柱臣氏の「黃河長江中下游新石器文化的分佈與分期」（考古學報、一九五七—二、七—二二頁）とは、新發見の事實を盛つているので重寶である。範圍はかきられているが、尹煥章氏の『華東新石器時代遺址』（上海一九五五年刊）も、またべつの方面の觀察がつているから重要である。まだまだ大綱をつかんだというにはいたらぬが、こういうものを手引きにして、中國先史時代の研究を紹介しつつ、わたくしのかんがえをのべてみたい。

一 沙 苑 文 化

狩獵時代 尹達氏の『中國新石器時代』（北京一九五五年刊）をみると、農耕生活の仰韶文化に先行するものとして漁獵生活の文化をかんがえてゐる。東北、嫩江河畔の昂々溪遺跡は、その代表である。野禽、野獸の骨や魚骨魚鱗の堆積のなかに、細石器と幼稚な土器とがみられ、漁獵生活を反映している文化である。

この説は、中國先史時代を無反省に仰韶文化からときおこした段階より一步前進したことをしめすが、それにしても昂溪先史文化は年代的にかならずしも仰韶文化にさきだつものとはいえない。この二キロもはなれた二つの文化をただ漁獵と農耕との對比によつて前後關係におくことは穩當を缺く。したがつて、われわれは、もつと手ちかなところに仰韶農耕文化にさきだつものをもとめるべきであらう。

調査をへて確實にさるべきものである。いま急に、その歴史的位置をきめることはできない。われわれは、現在のところ、仰韶農耕文化とちがつた沙苑文化のあらわれたことに満足するほかはない。しかも、それが仰韶文化のさかえた黄河の中原における発見であるのは、仰韶文化にさきだつ一種の石器文化であることをみとめてよさそうである。



第一圖 洛陽西安間遺跡圖

さいわい、こんどの三門峽ダムの工事にもなつて、そのふるい文化の一端があらわれた。⁽¹⁾それは一九五五年と五六年の普遍調査、すなわち「普查」^{「フーチャ」}の結果で、そのあたらしく発見された文化は、沙苑文化の名でよばれている。遺跡は陝西省の朝邑縣と大荔縣のあいだにひろがる砂丘地帯(第一圖)で、十六カ所の散布地がみつかった。なによりも土器をもたないということが、ひとつの特徴である。そうして散布する石器はみな礪石、フリント、石英の打裂石器で、いわゆる細石器である。石鏃、石匕、それに薄片の石刃があり、そのしんにあたる石核がある。これでは、まったくモンゴル砂丘地帯にみる細石器文化に似ている。砂丘に馳驅する獵人の文化とするにふさわしい。ただ、ちがつているのはここに土器がないこと、さらに石皿、石棒の磨碎用具がないことである。しかし、これが本質的にそうであるかどうかは、なお今後の検討が必要であらう。なにぶん、遺跡が砂丘の散布地では、共存關係を確認することは、たいへんに困難なしことである。

中原の細石器文化 ただ発見者のいうごとく獸骨が石化しているとすれば、これを中石器時代とか、新石器時代の初頭におくことも可能である。土器をとまなわぬのも偶然でないかも知れない。しかし、これらのことは、みな今後の

この沙苑文化が細石器をもっていることは、仰韶文化とも連系するし、また正真正の中石器文化乃至舊石器晩期文化とも連系する可能性がある。沙苑文化は、その中間的性質をしめすものとして、將來の開明が期待されるのである。

(1) 黄河水庫考古工作隊「黄河三門峽水庫考古調査簡報」(考古通訊、一九五六ノ五)、二四頁。

二 三門峽ダム

層位關係 三門峽ダムの「普查」は刻々とすすんでいる。六十人の考古學者が専念しているというから、おして知るべきである。これは中國科學院考古研究所の直轄の事業である。副所長夏鼐氏が主任であり、これが補佐として現地に活躍しているのは、日本の研究文献にもたいへんくわしい安志敏氏である。

ダムのために水中に埋没する面積は二千三百五十平方kmだという。東は陝縣、西は潼關、渭水をさかのぼつては臨潼まで、洛河をさかのぼつては朝邑、大荔におよび、黄河、涑水をさかのぼつては永濟、臨猗、邵陽にいたる。この間の「普查」で六十九の仰韶遺址、二十四の龍山遺址、十の殷代遺址等を發見した。⁽¹⁾各地で仰韶文化と龍山文化との上下相疊の關係もみとめられたという。このことは、たいへん重要である。仰韶文化がはいとか、龍山文化がはいとか、兩者が東西に對立するとかいうことは、しばしば論ぜられた。しかし、それにもかかわらず、この天下の中心、黄河の中流、西安、洛陽の中間において、河南省東部の諸遺跡とおなじように、仰韶文化が下層に、龍山文化が上層にあつたことは、ますますにも注意されなければならない。

龍山文化の名稱は、ただこの文化が最初にみいだされた山東省歷城縣龍山鎮城子崖の名によるというだけのことである。龍山文化という名稱だから龍山遺跡がもつとも代表的であり、純粹であるという意味は、すこしもない。どうしても龍山文化の名にこだわるようなら、この名をやめて、第一文化に對して第二文化とよんでもよい。そういう試みは陝西省において蘇秉琦氏によつておこなわれている。⁽²⁾仰韶遺跡だつて、仰韶文物と龍山文物とが、あのように混淆している状態では、

かならずしも適當な代表遺跡とはいえない。

仰韶文化の土器組成 この地域内で最大の仰韶遺跡は華陰縣西關である。九十二萬平方mにおよぶという。しかし、いまくわしい報告のあるのは陝縣南關附近、廟底溝の遺跡⁽³⁾（第一圖）である。これは約三十六萬平方mの遺跡で、そのうち二千四百四十八平方mを全面發掘した。ふかさ二m。仰韶、龍山、東周の層が相かさなっている。しかも、仰韶層では八十五の灰坑と百五十一の墓葬、龍山層では三個の灰坑と、一個の窖址とをみつけた。八十五の灰坑は窖もあるが、橢圓形であく大きなものは住居址であらう。ただし、柱孔はないという。

仰韶文化の基本的土器は(1)泥質の紅陶で、(2)砂質の粗紅陶がこれにつき、(3)泥質の黑陶はすくないという。これで、仰韶土器の組成がはつきりしたとおもう。従来はすいぶんあいまいで、灰陶があるという説すらあつた。こんど、われわれが見學できた半坡の仰韶土器も、主任の石興邦氏にたしかめたところ、やはりこのとおりのものであつた。仰韶文化に灰陶があるというのは、かんがえられないことである。仰韶文化に併行する甘肅の半山文化でも、モンゴルの赤峰第一文化でも紅陶のほかは砂質の粗陶があるだけである。それは色のうすい紅陶か、黒褐色であつて、けつして窖のなかで還元措置を講じた灰陶ではない。ただ灰色ということばは、すいぶん包括する範圍がひろい。これは灰色ではないかといわれても、粗陶の白っぽいものなら、けつして灰色でないとはいきれない。そういうあいまいさで、中國でも、わが國でも灰陶がいつの時期にもあるようにいわれるのである。現に三門峽ダムの報告にも『考古通訊』一九五六ノ五（一九五六年九月刊、五頁）では、仰韶文化の土器として、(1)細泥紅陶、(2)砂質粗紅陶、(3)泥質黑陶とならんで、(4)泥質灰陶、(5)砂質粗灰陶を主となすとかいてある。もちろん、特殊なばあいには、そういうこともおこらぬとはいえないから別であるが、一般的にはやはり『考古通訊』一九五七ノ四（一九五七年七月刊、二頁）の記述がただしいので、これは中國の考古學がそれだけ進歩したのである。

廟底溝の土器 さて、これらの土器で器形は碗、鉢（盆）と罐、それに小口尖底壺が多い。罐は壺の一種であるが、それ



第二圖 陝縣廟底溝彩陶—ガマ
(考古通訊, 1957-4)

ほど口のしまらないものをさすために、この名稱を借用することにする。それから甗、鼎、器蓋、器臺があり、「漏斗」があり、とくにめずらしいものとして竈がある。陶竈は、こんどはじめて報告されたもので、わが國の「かんでき」に似たもの、通風口は大きく、内部に三つの凸起があり、底に三つのひくい足がある。これはようやく床の完備したこと、あるいは木炭の使用をものがたるものであろう。

彩文は碗、鉢にほどこされ、壺、罐にはない。これこそ甘肅以外の彩陶に共通する特色である。黒の彩色を主とし、紅色はすくない。渦文と圓弧文など、かなりひろい帶狀をなすものは河南の西部ともちがうという。白色と紅色のスリッパ（陶衣）があり、白色のうえに黒でカエル（カエルというよりガマ、もしくはカメ）をかいたものがめずらしい。ガマ、あるいはカメの繪は甘肅馬家窖系の鉢にもある。それから黒色土器の罐片に浮彫でヤモリ（壁虎）をあらわしたものである。半坡の彩陶には人面と魚と鹿とがみられた。魚と鹿とは、どちらも主たる食料資源であつたから、當然であらうが、ガマとヤモリはどういう關心からであらうか。（第二圖）

彩文のほかに器面調整として撚糸文のような印文（細繩文）をみる。これは主として小口尖底壺と罐にほどこされている。半坡にもふつうにみるが、赤峰良質土器のこまかい弧線文とも外見だけはよく似ている。

なお土製品としては腕輪の陶環が多い。あるいは陶釧といった方がよいかも知れない。それに紡錘車（紡輪）もあり、また陶片を加工した陶刀もあり、また陶製の彈丸もある。石器は石斧と石鑿、それに單孔石刀（石庖丁）と彈丸がある。

龍山文化と灰陶 つぎは龍山文化であるが、まずその基本の土器である。さきの一般報告では(1)細泥黑陶と(2)泥質灰陶に(3)夾砂粗灰陶だといひ、あとの陝縣報告ではこのほかに(4)泥質紅陶と(5)夾砂粗紅陶とをくわえている。これもあとの方の報告が正確だとおもう。龍山文

化に紅陶をとまうことは纔の色彩を想起しただけでもうなずかれる。ただ龍山文化の黒陶、紅陶以外を灰陶の名でよぶことには若干問題がある。というのは還元焰轉化を充分に意識しておこなつた灰陶かどうかということである。灰陶をうるためには、いつとき酸化でたきあげた窖を急に冷却するか、水蒸氣をおくるとかして、窖のなかを還元状態にしなればならない。これが土器を焼きしめる秘訣であり、灰陶をうるゆえんである。はたしてそういう灰陶であるかどうかということをたしかめてほしい。わたくしの、まずしい見聞では、龍山文化において黒陶と「灰陶」とのさかいは不安定である。のみならず、紅陶とのさかひさえ不安定のようにおもわれる。したがつてこのさい色彩はあまり問題にせず、(1)黒陶以外に(2)双耳罐アンフォラをふくむ泥陶と(3)甬をふくむ粗陶とを分類すべきであらう。

模製と輪製 ところが、このつくりかたについても、さきの報告は手制と模制が主で、輪制がすこしくあるというに對し、あとの報告では手製を主とし、輪製の明證あるものをみないといつてゐる。これもあの方のただし。模制を型制とすれば、あきらかにまちがいであつたし、印文とすれば手制と模制とは一つの技法であつて二つの技法ではない。前報告には、仰韶陶についても手製を主とし一部に模制を採用するといつてゐるが、わたくしのみるところでは、みなまきあげ法であるから手制である。内外からきつたたいて接着を密にするから、どうしても印文のこるようになることになる。もしこれを模制といへば、手制にして模制なのだ。そしてそのあとでいいねいに印文をけしのが彩陶である。これ以外に方法はないとおもう。

廟底溝と三里橋 器形は扁平足の鼎、それから圓筒形の竈がある。陶竈は底なく、大口があいて、上部に圓孔が三つある。典型的な輪制の黒陶をみず、條簋文(5)と繩席文が主で、方格文はまれである。甕が多く、甬がすくないという。したがつて河南西部の龍山文化ともちがう。しかし、この廟底溝に對する三里橋の遺跡は河南西部の龍山文化におなじだから、この廟底溝の様相は龍山文化の早期をしめすものだろうという。この點は注意すべきである。

廟底溝龍山層の石器はすくない。石鑿があり、長方形單孔石刀、半月形雙孔石刀、三角形扁平石鏃がある。骨鏃、骨錐、

蚌刀がある。

窖の傳統 窖址は土地を掘り、小さいりの粘土をぬつた丸窖である。焼成室(火膛)と下室(氣口)にわかれ、氣道は八つにわかれてすすみ、そのうえに窖竈がある。窖竈には二十二の氣眼があり、そのうえが焼成室である。これは澧水流域の龍山文化の窖、それから半坡や鄭州林山砦の仰韶文化の窖にもよく似ている。さらに洛陽孫旗屯、鄭州屹塔王の殷代窖、また洛陽潤東の東周窖にも一貫したところがある。だから、窖には仰韶、龍山、殷周文化を通じた一貫した發展がたどられ、そのあいだの連續性が痛感せられる。

しかし、いずれにしても、この三門峽ダムの東端にちかい陝縣廟底溝の仰韶、龍山兩文化は、河南西部よりも晉南、陝西の文化にちかいは注意されてよい。

註(1)黄河水庫考古工作隊「黄河三門峽水庫考古調查簡報」(考古通訊、一九五六ノ五)。

(2)蘇秉琦、吳汝祚「西安附近古文化遺存的類型分布」(考古通訊、一九五六ノ二)。

(3)黄河水庫考古工作隊「一九五六年秋河南陝縣發掘簡報」(考古通訊、一九五七ノ四)。

(4) J.G. Andersson: *Researches into the Prehistory of the Chinese* (Museum of Far Eastern Antiquities, Bulletin No. 15), Stockholm 1943, pl. 183-1.

(5) アンデルソン博士の basket pattern にあたるが、籃そのものには關係がないのだから條籃文の方がよい。わが國の條籃文に似るが、それは擦痕で印文ではない。

三 半坡と陝西三期

半坡の住居址 三門峽ダムにもつともちかく、しかも、もつとも重要な仰韶遺跡といえは、西安の半坡(第一圖)であろう。遺跡は澧水東岸のひくい丘陵上にあり、一九五二年、西安の第二發電廠を建設しようとして發見された。一九五三年十月、一九五四年九月、十二月、一九五五年七月、九月、十一月と發掘がつづけられた。今日では、ついに發電廠の建設は他にうつされ、もつばらこの遺跡をまもる博物館になつてゐる。廓内には陳列館、工房、客房、宿房のいく棟かがで



第三圖 半坡住居址

中國科學院 考古研究所寫真

き、そのなかで悠々と發掘調査をつづけている。やはり考古研究所の西安考古研究室に屬し、日本語のたつしやな石興邦氏が主任である。

同氏の報告によると、丘は附近より七、八mたかい。南北約二百m、東西約百五十m、遺跡はほとんどその全域にわたる。

東北部に漢代の文化層があり、中央部にふかくほりこんだ戰國時代の墓坑があるほか、全部が仰韶期の文化層である。二、三十cmの表面耕土をのぞくと、そのしたは仰韶層が五、六十cmあり、あとは黄土の地山である。いままでに發掘されたところは西北の住地と、その北方、むかしの溝をこえた葬地とである。三十戸以上の住居が發見され、約百三十個の墓葬がみいだされている。ほぼ住居址の中央に發見された大住居は東西二十、南北十二m半の長方形で、一mくらいあつい壁をめぐらし、なかに六本の柱があつたらしい。柱徑約五十cm。これは集會所のごときものだといふ。ふつうの家屋には四邊形と圓形とがある。四邊形は四mに六mくらいの長方形で、一mから五十cmくらいふかく掘つている。まわりに二cmから十cmばかりの壁がぬつてあり、隅まるである。柱はなかに一本とか四本あつたが、屋根はたるきを四方の地上にふきおこし、すさいりの土をおいたものであつた。出入口はせまく、やつと一人がとおれるくらいのもが掘つてある。圓形のものには、これとおなじく堅穴式の構造になつたものもあるが、それでも周壁にはほそい柱をたくさんぬりこめている。堅穴でない、地上式の圓形家屋は直徑五mくらい。まわりの壁



第四圖 半坡彩陶—魚文

(考古通訊, 1956—2)

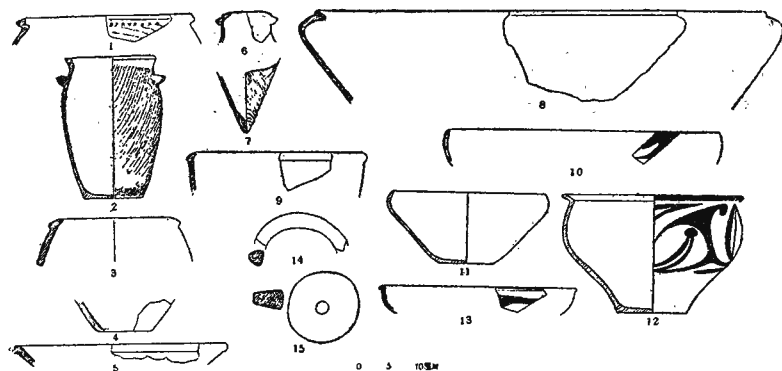
にぬりこめた小柱は六、七十本ある。壁のあつさは五、十cm。屋根は周壁にたるきをならべ、小さいりの土をおいたもの、ちよつとモンゴル包に似た構造である。内部は二本か六本の柱、爐があり、爐の左右にはしきりがある。(第三圖)

米の栽培 家のまわりにはかならず若干の窖がある。これにも方圓二形式があるが、断面は口がしまつて袋狀をなし、直徑一m、たかさ一mくらい、のちにはもつと大きなものもある。窖の用途はもつぱら穀物の貯藏用であつたとおもう。ここでは粟が発見されたが、河南澠池縣仰韶遺跡で米が発見されたことは有名な事實である。それにもかかわらず、華北における米の栽培に疑問をもち、なかには陸稻かとうたがう人もいる。もちろん量的には粟の方がうえてあつたかも知れぬが、稻米の重要であつたことは古文獻にも顯著なところであり、また今日の華北で見られるような泉源栽培をかんがえれば、用水上すこしも無理はない。

これについて石興邦氏がかいた澧水流域の現状は大いに參考するに足る。すなわち、南のかた秦嶺に發した澧水は澧峪口をでて陝西の黃土高原を北流し、小王村で渭河にはいるまで全長約八十華里ある。そのうち澧峪口から五樓にいたる二十華里は叢林草地、ついで水稻田になる。五樓から關門鎮にいたる三十華里は「地勢較高、土地肥美」、「周代的豐鎬兩京」の地、また先史遺跡も多いが、いまは麥畑である。それより渭河にはいる、あとの三十華里は渭水氾濫の鹹灘低地である。つまり一定の地域には充分に水稻が栽培ができるのである。そのむかし、半坡人が澆水を利用して水田をつくることは結構ありうることである。

家畜と狩獵 そうして、かれらの生産道具となつたものは石斧、石鏃、石刀、陶刀であつた。ただ土掘り道具がなにてあつたかがあきらかでない。農耕以外に家畜があつたことはいうまでもなく、豚と犬とが飼育された。家畜の木柵かとおもわれる圓形ならんだほそい柱穴もあつた。

狩獵道具には弓矢と投槍があり、鏃は獸骨が主としてつかわれた。また漁獵用として骨角製の釣鉤があり、鉞があり、魚網用の錘石もあつた。しかも、これらの生業を象徴するかのごとく、彩陶のな



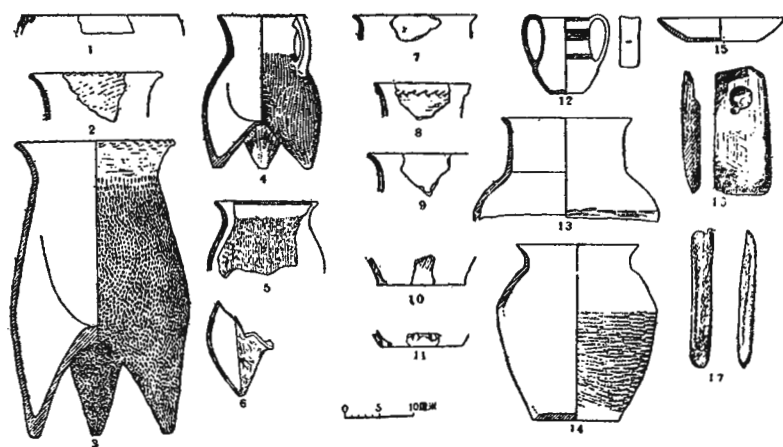
第五圖 陝西三子文化 一仰韶一

(考古通訊, 1956-2)

かにシカと魚(第四圖)のみられることは興味ふかい。

半坡の墓葬 小兒をほうむつた甕棺は、しばしば家のまわりで發見され、その数は五十以上におよんでいる。一人まえになつていない小兒たちは、喪葬において、成人だけのあつかいをうけなかつたのであろう。成人たちの葬地は溝をこえた丘陵の北端にあつた。長方形の坑を掘つて西方に頭して仰臥伸展の形式でほうむられた。副葬品としては、きまつて粗陶の罐や細泥の陶鉢や小口尖底壺がみられた。仰臥のほかは、うつぶせにほうむつた俯身葬も十五例あつたし、二人合葬、四人合葬の二次的なものも、それぞれ一例ずつあつた。

半坡の土器 土器を焼いた甕も五、六個みいだされた。それは陝縣廟底溝の龍山文化の甕とおなじような構造であつた。土器はさきにもいつたごとく、(1)泥質の紅陶と(2)粗質の紅陶と(3)泥質の黒陶とであつた。泥質の紅陶の碗や鉢には彩色がみとめられるが、それは直線的な幾何學文である。西安西部の魚化寨の彩陶はこれとおなじであるが、べつに澧河上流の五樓のような渦文をもつてゐる。渦文のないことは、半坡が、仰韶文化のうち、はやいものでないことをしめすようにおもふ。小口尖底壺の口づくりも、安志敏氏があげた九種のうちでは中期のもののようにみえる。しかし、このものは撚糸文がほどこされ、條籃文でない點が、ひらいた口でないこととともに、晩期としにくいようである。白いスリップをつけた彩陶もあつて、河南との類似ともいえるが、爪形文(錐刺文)のときは魚化寨などにみる特色である。



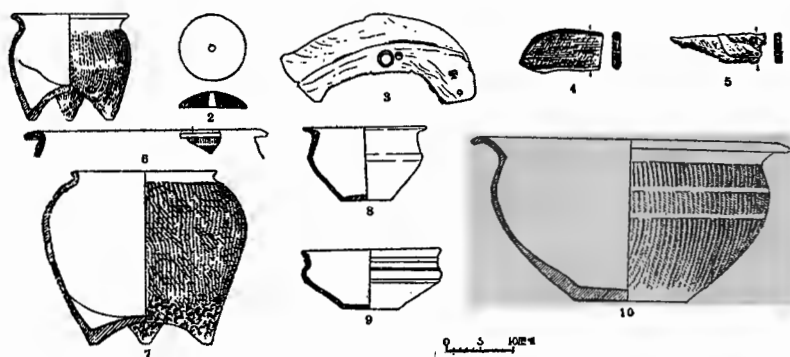
第六圖 陝西三文化—龍山—

(考古通訊, 1956—2)

もちろん、陶釧は多い。玉製の耳飾もあり、小玉を数珠のようにつないだものもあつた。孔をあけた貝殻、獣の牙、骨の筭など、たくみにつくられた装飾品もすくなくない。

開瑞莊の三文化 この半坡に似た遺跡は、澧河、澧河地域で約二十カ所発見されている。米家崖、魚化寨、開瑞莊(客省莊)、五樓などである。蘇秉琦氏はこれを文化一(第五圖)とし、仰韶文化の名でよんでいる。これに對し文化二(第六圖)は開瑞莊、河底村など六カ所で、龍山文化の名をあたえるのをひかえている。つぎの文化三は周文化で、その遺跡は九カ所ある。しかし、べつに殷代併行の遺跡は三門峽ダム地域に十カ所以上⁽⁷⁾発見されているから、これは殷周文化(第七圖)とよんでもよいであろう。

蘇秉琦氏の態度はすこぶる慎重である。しかし、文化二は(1)砂質灰(紅)陶、(2)泥質黒(灰、紅)陶があり、甗、鬲、罍、罐、双耳罐、盤などの器形があり、條籃文、方格文の印文があり、まったく龍山文化である。とくに開瑞莊では、りつばな薄手黒陶の三足盃があり、饒さへある。それに甘肅の齊家文化にも比すべき双耳罐^{アンボウ}がある。しかも、この開瑞莊の遺跡では、この三種の文化が相ついでのこした灰坑、墓坑が相接してあらわれ、その前後關係が明瞭に示めされている。すなわち、仰韶文化の圓底灰坑をきつて、龍山文化の平底灰坑がつくられ、これら二つの灰



第七圖 陝西三文化一殷周—

(考古通訊, 1956—2)

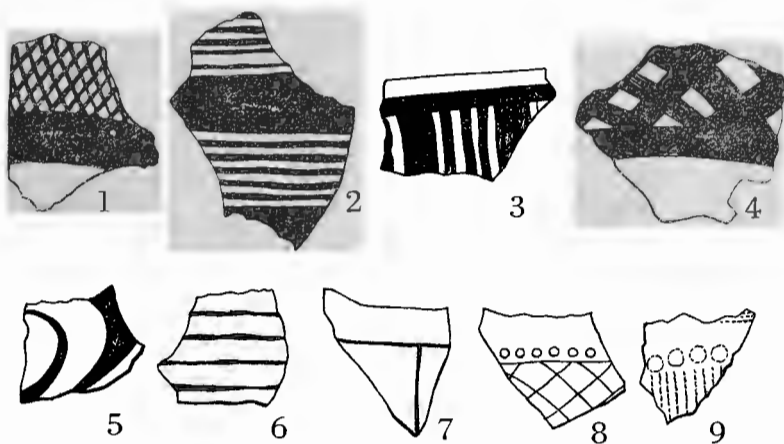
坑を切つて周代の墓坑がいとなまれている。

渭水上流 さらに渭水をさかのぼると、鄠縣、武功、扶風、栒邑、郿縣、岐山に仰韶遺跡がある。寶鷄縣鬲鸞臺の遺跡ははやくより有名であつたが、新石器時代の早期といふより、仰韶文化と龍山文化との遺跡である。甘肅省にはいつても、渭水流域の天水、清水、禮縣には陝西ふうの仰韶遺跡がある。

鳳縣郭家灣下層 ところが、分布のうえでとくに重要な遺跡は秦嶺の南で、甘肅省にちかい鳳縣龍口村郭家灣の遺跡⁽⁸⁾であらう。これは四川省をながれる嘉陵江の上源にあたり、南北の二丘よりなる。北丘は約四萬四千平方m、南丘は約二萬五千平方mある。川陝公路の開通にあたり、東西に分斷された。いま東丘、西丘とよぶのは、南丘の東西である。一九五四年四月より七月にかけて、陝西省文化管理委員會工作組が十個の「探方」^{タレンファ}、七百平方mの發掘をした。これによつて灰坑二十三、柱孔九、窖址三を發見した。

南丘には上下の二層があり、北丘には南丘の下層にあたる一層がある。下層の土器は(1)粗紅陶、(2)泥質紅陶、(3)泥質黑灰陶で、ほかに陶釧四、陶球一、紡輪一四、陶刀一があつた。碗鉢の容器はもとより多く、小口尖底壺もあるが、鼎足はすくなく、條籃文もないという。彩陶はわずかに十二片、黒と紫色のかんたんな平行線、斜格子文である。白色のスリップがないところを見ると非河南的といえようか。べつに朱彩の平行線をもつた黑灰陶がある。

石器は五百點。石刀は左右をうちかいた剝片石刀が百點、單孔、双孔の石刀



第八圖 鳳縣郭家灣彩陶等圖

(文物參考資料, 1956—2)

などが七十八點。石斧は八十點、石鑿二十二點、石鏃十點、網錘百七十六點、磨石鏃十三點など。骨角器も若干あるが、貝製品はすくない。

灰坑は上層にもあり、下層にもあるが、窖址三は下層に屬し、地中にもうけられた丸窖である。下室から氣道三條を通じただけのものと、焼成室とのあいだに竈をもうけたものがある。

鳳縣郭家灣上層 上層は紅陶と灰陶だが、灰陶が大部分をしめ、繩席文があり、輪製が多い。罐、鉢、鬲、三足器、平底器があり、馬鞍形の口をもつた双耳罐、それから尖底の罐がある。馬鞍形の双耳罐はまったく甘肅寺窪文化の特徴に一致する。骨角器もあるが、注意をひくのは東丘からでた九片の卜骨である。文字はない。灼だけのもの、鑽をくわえたもの、鑽、鏃、灼をかねそなえたものがある。

上層では墓葬五例を發掘した。一は屈葬、二は瓦鬲葬、二は瓦罐葬という。瓦鬲、瓦罐葬はみな小兒壙棺である。

こうみると、下層はほぼ仰韶文化の系統であることがわかるが、彩陶のすくないところをみると末期的なものであろう。また少數ながら、刻線の格子文、櫛目文（筲文）のあるのは齊家文化との連關をしめすものである。上層文化は卜骨の存在によつて、むしろ殷周併行の文化三、あるいは甘肅の辛店期に應ずるものとおもわれる。しかも、ここの鬲をみると足がすこしみじかくなつて、西周ごろとみとめられるものがある。

ここから嘉陵江をくだつて四川盆地にはいると、黒灰色土器と大形玉石器をともなつた龍山系の文化があるが、詳細なことはまだわからない。

註(1)考古研究所西安工作隊「新石器時代村蕃遺址的發現——西安半坡」(考古通訊、一九五五ノ三)、七頁以下。

考古研究所西安半坡工作隊「西安半坡遺址第二次發掘的主要收穫」(考古通訊、一九五六ノ二)、二三頁以下。

(2)このほか同氏は『人民中國』一九五七ノ五、(四二頁以下)に日文で「西安半坡村の遺跡から——氏族制社會の瞥見」という文がある。

(3)石興邦「豐鎬一帶考古調查簡報」(考古通訊、一九五五ノ一)、二八一—三一頁。

(4)修柱臣「黃河長江中下游新石器文化的分佈與分期」(考古學報、一九五七ノ二)、一一頁には、はつきり泥質紅陶、砂質灰褐色繩文陶、泥質黑陶と云つてゐる。

四 甘肅 三期

甘肅六期 甘肅における齊家、半山(仰韶)、馬廠、辛店、寺窪、沙井の六期はアンデルソン博士のつくつた編年で、だれも知つてゐる。けれども、いたつて評判がわるい。甘肅六期にふれるほどの人は、かならずといつてよいほど、けちをつけている。だが、わたくしは、アンデルソン博士の六期に對しては、大いに敬服したし、これによつて考古學の方法そのものに對しても、大いに信頼感を増大した。

最初、アンデルソン博士がもつた資料は、その後、北京西城の兵馬司胡同にあつた地質調査所にならべてあつた。

(5)「黃河三門峽水庫考古調查簡報」(考古通訊、一九五六ノ五)、五頁、第三圖。

(6)蘇秉琦、吳汝祚「西安附近古文化遺存的類型和分佈」(考古通訊、一九五六ノ二)、三三頁以下。

(7)前引の「三門峽水庫簡報」(考古通訊、一九五六ノ五)、一頁および許益「陝西華縣殷代遺址調查簡報」(文物參考資料、一九五七ノ三)、六四、六五頁。

(8)徐炳昶「陝西最近發見之新石器時代遺址」(北平研究院院務彙報、第七卷六期)、二〇八頁。

(9)陝西省文物管理委員會「鳳縣古文化遺址清理簡報」(文物參考資料、一九五六ノ二)、三四—四一頁。

これをみたかきりでは、アンデルソン博士の分期はいちおう肯定せられた。充分に證明されたとは、もとよりいえないが、形式學的にもつともおもわれる點があつた。多少とも、當時から不安のあつたのは齊家期であるが、それでも、そこからとりだしてどこにいれるかとなると、まづたくあてすつほう以外に方法はなかつた。だからアンデルソン博士が、あの資料であの分期をしたことは、卓見として感服するか、形式學的方法を平凡に適用した、あたりまえのこととしてみすこすかのどちらかであつて、なにも非難がましいことは、きくべきすじあいのものではなかつた。

齊家期の位置 しかし、そのうち山東城子崖の龍山文化が知られるようになると、それとの類似から齊家期の位置がますます不安定になつてきたのは、やむをえないことであつた。一九三七年にバッフォーフェル氏は、仰韶、馬廠、齊家と順序づけたというが、當時の資料からすれば、先見の明をほめるより、むしろ大膽であつたというほかはない。アンデルソン博士も、一九四三年には、齊家期の方が、仰韶期よりも家畜がゆたかになつたことを注意している。⁽²⁾ 仰韶期の臨洮縣馬家窑にはブタとイヌ、貴德縣羅漢堂にはイヌとヒツジしかないのに、齊家坪遺跡にはブタ、イヌ、ヒツジのほかにヤギやウシがある。また、羅漢堂と齊家坪の土器を比較したブリン・アルティン女史も、土器のうえからこのことを論じている。⁽³⁾

だが、この問題に決定的事實をあたえたのは一九四五年五月、夏鼐氏が甘肅廣通(寧定)縣半山魏家咀陽窪灣の齊家期墓葬を發掘したときである。そのとき、夏鼐氏は、この齊家期の墓中に半山式の二陶片を發見したのである。⁽⁴⁾ これでは、どうしても半山はふるく、齊家はあたらしいわけである。しかし、それでもまだ、馬廠とか辛店との關係については、まづたく言及されていなかった。

一九五六年五月、黄河上流劉家峽ダムの建設にともない、黄河、洮河、大夏河の一帯が大々的に調査された。⁽⁵⁾ その結果百七十六ヶ所の遺跡が發見されたが、そのうちわけは仰韶四十七、齊家六十五、「唐汪」一、辛店七十九、寺窪一、卜密二ということである。このうち、永靖縣張家嘴と吳家の二ヶ所において、辛店層が齊家層のうえに發見されたので、齊家期

が辛店期のまえに挿入さるべきことが明白になつた。

仰韶二期と齊家二期 アンデルソン博士以來、甘肅の仰韶文化には半山の葬地文化と馬家窖の住地文化とのちがいがあるといわれていた。安志敏氏も、永靖縣三坪の葬地から馬家窖式の壺がでたというので、この葬地と住地との併行關係をみとめている。しかし、半山彩陶と馬廠彩陶との繼承關係より、つぎのごとき併行のシエマをつくつてゐる。

〔住地〕 馬家窖前期→馬家窖後期

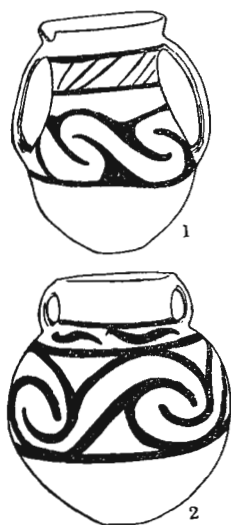
〔葬地〕 半山期→馬廠期

この馬家窖期の二分説は、なお今後に検討さるべき課題とおもふが、とにかく半山と馬廠期を一括して齊家期に先行せしめることは、これで決定したとみてよい。

これに對して六十五ヶ所の齊家文化の遺跡は、まず白灰面のある住居址によつて、龍山文化との一致が知られた。のみならず、全體的に陝西の龍山文化と近似することが痛感された。しかし、齊家文化は、腰以下に條籃文のある高大な双耳罐があり、甗がないものと、アンフォラ式双耳罐と盂を主とし、甗が多く、罍、盃のあるものの二種にわけられた。前者はふるく、後者があたらしいのである。なお臨夏雀家莊では直線幾何學文の彩陶罐が発見され、齊家期にも彩陶のあることが知られるとともに、從來齊家文化の特色とかんがえられていた櫛目文が、ただの二片しかでず、あまり主要なものではないとかんがえられるにいたつた。

辛店期の少數民族文化 さてつぎに、彩陶の粗末簡單になり、若干の銅器をともなう辛店文化は、齊家文化のあとにおこり、中原の殷周時期に併行する。たぶん、少數民族の文化であらうという。しかも辛店期は「唐汪」式土器をもつた前期のものと、これをもたず、甗の變化した後期のものとがあるところ。

これに對し、青銅器の寺窪文化は馬鞍式口縁をもつた双耳罐を特色とするが、この分布は臨洮寺窪山、石家坪の葬地に⁽⁶⁾かぎられている。火葬をみることから夏鼐氏のかつて指摘したごとく、氏羌民族の原始文化であるという。しかも、時期



第九圖 「唐汪」式土器圖
(考古學報, 1957-2)

的には辛店期併行である。ところが、青海西寧のカイサフ下窖から下西地にかけて分布する下窖文化は鼎鬲をみず、銅器もちがい、寺窪文化ともまたちがう。辛店期の別種文化で、少數民族のものであろう。永靖黄河沿岸にも二カ所の同種遺跡を発見したが、ややちがつたところもあるので、また同期の別種の文化かも知れぬという。

さて沙井文化は銅器が豊富で、城廓すらある。分布は民勤、永昌、古浪一帯、いわゆる「河西走廊」地區にかぎられる。けつして劉家峽ダム地域におよんでいない。たぶん大月氏以前にいた一種の少數民族の文化であらう。時期的には辛店、寺窪とおなじでよい。

また新発見の「唐汪」文化の土器(第九圖)は粗質陶で、紅色スリップがあり、渦文を主とする。形は小口罐、單耳罐、双大耳罐、四耳罐、單耳杯、豆、鬲等がある。このうち豆は半山馬廠文化のごとく、大双耳罐は齊家文化にちかく、四耳罐は辛店に似、單耳罐、單耳杯、鬲は唐汪獨特といえることができる。なかなか複雑な様相をしめすが、辛店文化よりはやはり、併行というところであらう。

なおもう一種あたらしく発見されたのは四壩スエバ文化である。やはり「河西歩廊」の山丹縣にある。いままでの彩陶に似ず、双耳罐を主とし、單耳罐、單耳杯がある。沙井文化とまつたく一致しない。遺跡は大きく、四萬平方mにおよび、包含層の堆積はあつい。農業を生活の基礎にしたことはあきらかで、大月氏、匈奴とはちがう。鬲なく、銅器なく、一種の新石器文化で、沙井文化より以前だという。

甘肅三期 いまこれらを表示すると別表のごとくになるかとおもうが、大綱は仰韶、齊家、辛店の三期で、寺窪、唐汪、下窖、沙井を辛店併行の少數民族文化に歸したところがあたらしい意見である。アンデルソン博士の六期とくらべて大い

仰韶文化	龍山文化	殷周文化	黃河中下流地域
馬家窑前期(住地) 馬家窑後期 半山期(葬址) 馬廠期	齊家前期—齊家後期	辛店前期—辛店後期 寺窪文化 卜窪文化	臨洮—永靖 臨洮 西寧永靖 西寧東鄉
新石器中期	新石器後期	沙井文化 青銅器文化	河西走廊 黃河上流地域
	四霸文化		分期 地域

にかわつたともいえるが、大綱はあまり變化してはいないともいえる。わたくしが考古學の形式學的方法について、ある種の信頼感をえたというのは、このためである。それにしても、半山馬廠葬地と馬家窑住地との併行關係は、まだ人々を納得せしめない。中國においても、これに對して批判があるらしいが、安志敏氏は、それに答えて、こうした住地と葬地の關係は劉家峽ダムにおいては普遍的だといっているから、そのくわしい資料の發表をまつよりほかはない。また、安志敏氏は、この辛店期の文化の地方差を、ただちに民族的差違にむすびつけたが、この點もまだまだ問題がありそうだから、今後の調査の進展に期待したい。

註(1) J. Bachhofer: *Zur Frühgeschichte Chinas* (in *Die Welt als Geschichte*, 1937).
(4) 夏鼐「齊家期墓葬的新發現及其年代的改訂」(考古學報、三)、一九四八年刊。

(2) J. G. Andersson: *Researches into Prehistory of the Chinese* (MFEA, 15), p. 43.

(3) M. Blyn-Altin: *The Site of Ch'i-chia-p'ing and Lo-han-tang in Kansu* (MFEA, 18), Stockholm 1946.

(5) 劉家峽地區的考古調查(考古通訊、一九五六ノ五)。安志敏「甘肅遠古文化及其有關的幾個問題」(考古通訊、一九五六ノ六)。

同「略論甘肅東鄉自治縣唐汪川的陶器」(考古學報、一九五七ノ二)。

(9) 夏鼐「臨洮寺窪山發掘記」(考古學報、四)、一九四九年刊。

(7) 馬承源「中國新石器時代的物質文化—文商權」(文物參考資料、一九五七ノ二)、四二、四三頁。

(8) 安志敏「關於中國新石器時代物質文化的幾個問題」(文物參考資料、一九五七ノ二)、四五、四六頁。

六 河南の仰韶期と龍山期

山西と河北 三門峽のダム地帯から山西にはいると、すぐ夏縣の西陰村、萬榮(萬泉)の荆村、臨汾の劉村など、以前から有名な仰韶、龍山の遺跡がある。最近には、西南部で曲沃、翼城、襄汾、臨汾、洪趙などの遺跡、中部で太原光社、義井、祁縣梁村の仰韶遺跡、東南部で壺關好牢村の龍山遺跡などが發見され、これにつぐ殷周遺跡も若干知られている。河南では陝縣のすぐ東に、かの有名な澠池縣仰韶村、不召寨の遺跡がある。最近にはその南の洛水流域、洛寧縣で十三カ所の仰韶、龍山遺跡が發見されている。澠池縣のものによく似、城子崖のような薄手の黒陶はないという。⁽⁵⁾それから洛陽の諸遺跡、もと廣武縣の秦王寨、池溝寨、青臺、陳溝の諸遺跡があり、鄭州の大遺跡がある。さらに太行山脈にそつて北上すると浚縣辛村、大賚店、劉莊、同樂寨、安陽後岡、侯家莊等があり、河北省にはいると正定南楊莊、⁽⁷⁾曲陽釣魚臺、⁽⁸⁾平山ダムで彩陶遺跡が發見され、唐山大城山で龍山遺跡がみいだされている。しかし、これより東南、黃河下流の平原地帯にでると、永城造律臺、⁽¹⁰⁾山東省歷城龍山鎮城子崖等の龍山遺跡が有名で、彩陶をみず、いよいよ龍山文化の圈内になる。

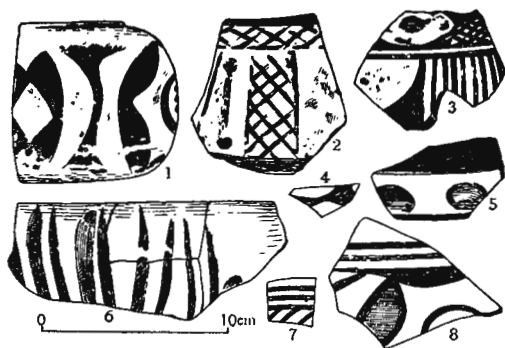
中國文明の發祥地 この河南省の黃河流域は、仰韶、龍山、殷周の三文化が、もつともまんべんなく分布し、その前後相疊の關係も、もつとも明瞭なところである。これに山西の南部と陝西渭水の流域とをくわえた地區は、文献上にも關中、三河の地として重要であるが、現在知らわれているだけの考古學的知見からいつても、やはり中國文明の發祥地である感がふかい。だから、わたくしには、どうしても仰韶、龍山、殷周文化の展開は、この地においておこり、その他の土地はこの文化の波及によつてしだいに文明がひらけたものと解されるのである。ここでは、その重要な遺跡として、洛陽と鄭州の發掘をとりあげたいとおもう。

洛陽澗濱 洛陽では、西郊、澗水の兩岸に廣大な仰韶遺跡¹⁰がある。その橋西、新開の道路の兩側に百m以上の大包含層があらわれた。うえから〇・五〜二m間は殷周漢の混雜層、二〜三m間は龍山文化層、三〜四m間は仰韶文化層、そうして六〜七m間に往々西漢の墓坑の掘りこまれたのを見る。

ここにトレンチ(探溝)を二本入れたが、仰韶の文化層はいたつて豊富。そこから採集された土器は(1)泥質紅陶、(2)夾砂褐陶、(3)灰陶があるという。しかし一々の器形を検すると灰陶の存在はあきらかでない。むしろ、ここでは夾砂黑褐陶の出現に意味がある。これは陝縣廟底溝、西安半坡の粗紅陶にあたるものだ。鼎、罐、碗、蓋などの器形をみるが、小口尖底壺だけは、ここでも粗紅陶である。泥質紅陶は碗鉢の類で、彩陶は黒、紅、紫のかんたんな彩色があり、白のスリッブもある。石器は双側を缺いた楕圓石刀に石斧、石鏃、石釧などである。(第一〇圖)

澗濱灰坑 興味をひくのは東岸で發見された仰韶の灰坑 H 5 である。これは燒土をふくんだ窖だが、純粹の仰韶系で、ここから夾砂黑褐の鼎、罐、碗、泥質紅陶の鉢、それに黑陶十一片と單孔長方の石刀がでた。この黑陶はあつさ一・五乃至二mmの純然たる龍山黑陶である。報告書は、これが自製であるか、輸入であるかと設問しているが、仿製にしても輸入にしても、東方に有力な龍山文化の存在をかんがえなければならぬ。それもひとつの方法かも知れない。しかし、そうすれば、(1)仰韶文化にある薄手でない黑陶の存在はどう説明するか、(2)あるいは黒紅色わけの土器をどう説明するか、また、(3)この黒褐色粗陶をいかにみるか。こういう問題がおこってくる。わたくしは(1)(2)のことから、仰韶文化のうちに黑陶のうまれてくる情況があつたと解している。また(3)のことがからも、陝西の仰韶文化が河南において紅色をうしない、黒褐色、灰褐色になつてゆく道程、そのうちに鼎をうみ、さらに鬲をうみ、黑陶化がすすむのではないかとおもわれる。とにかく、河南の仰韶文化は陝西の仰韶文化に比して、粗褐陶をもち、粗紅陶をもたず、また鼎をもつてゐるのが注意される。

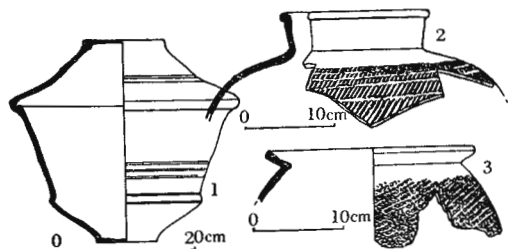
これに對して澗濱の龍山文化はすくない。それでも、はつきり龍山文化の器形をもつた黑陶鉢、黑陶蓋があり、有光の



第一〇圖 洛陽澗濱彩陶圖 (考古學報, 1956—1)

ない。器物は大部分が灰色(たぶん灰褐色)、あるいは紅色素文陶で、彩陶と線文陶があり、卵殻陶(蛋壳陶)と磨光黑陶がすこしある。條籃文、繩席文、方格文があり、鼎足多く、圈足もある。彩陶鉢、小口尖底壺、甗、直壁杯、高圈足豆、陶釧、骨鏃、石斧、石刀等あり、その鼎、甗、杯、豆、平底碗(第二二圖)は龍山文化に一致する。報告者は龍山文化の影響ととくが、自生の可能性がないではない。わたくしは、むしろ仰韶末期の過渡の様相として、こういうような状態があつたのではなからうかと想像している。佟柱臣氏の見解も同様である。

圈足がある。また條籃文と方格方文の罐壺(第二一圖)もあつて、龍山文化たることは明瞭で、陝西の龍山文化よりは、より龍山的であるといえる。洛陽孫旗屯 澗濱の西に孫旗屯がある。秦嶺の一支脈たる丘陵がまさにきえようとする東端にあり、東と北とは洛陽の平野に對している。東西約百八十m、南北約五百mの大遺跡だが、その北部四千平方mの地を整理して仰韶の灰坑四、仰韶晩期の灰坑二十四を調査した。仰韶の灰坑は彩陶と紅陶がほとんどで、細繩文があり、小口尖底罐あり、鉢あり、陶釧あり、石斧あり、まさに仰韶文化の遺物であるが、仰韶晩期といわれる方はかわつてゐる。



第一一圖 洛陽澗濱龍山陶圖 (考古學報, 1956—1)

洛陽では、潤濱にも、孫旗屯にも殷代の遺跡がある。市の東郊にもある。また、周代の遺跡は、もとよりもつと多く、成周、王城の城址さえあらわれている。孫旗屯の殷代窖址は下室にたてのしきりがあり、焼成室の床にまいるい氣眼が不規則にあり、鄭州銘功路の窖址と完全に一致する。

鄭州の新発見 鄭州でも、仰韶文化の遺跡は林山砦、白莊、齊禮閣の三カ所にある。龍山文化の遺跡は林山砦、二里岡、齊禮閣、牛砦等の十一カ所にある。しかし、ここでとくに問題になるのは龍山文化と殷周文化とのむすびつきであろう。鄭州における殷代文化層は、安陽小屯よりもふるくさかのほり、(1)南關外層、(2)二里岡下層、(3)二里岡上層、(4)人民公園層の四つに編年されている。最後の人民公園期は、安陽の小屯期に比定され、二里岡上層と下層とは殷代の前期とされている。

南關外層は、こんどはじめて安金槐氏の紹介にみえるが、鄭州の河南文物工作隊には大きな竈、とがつた三脚の高、無柱また有柱の罍、擦痕の罐、繩席文の壺などがならべられている。罍の發達はいちじるしいが、甗子窩高麗寨のような、たかい甗は特色がある。黒褐色土器で、砂質のものもある。南關外にあり、二里岡層よりしたの層である。

洛達廟層というのは、一九五六年春、西郊洛達廟でみいだされたもので、今春、董莊の發掘では二里岡下層のしたに發見された。それは底のまるくなつた特別な罐があり、足のたかい特殊な豆があり、ふかいまたあさい鼎があり、罍と罍がない。龍山文化に似て繩席文は發達している。そういう點で南關外層にさきだつものとしてされている。こういうふうにして、殷周文化と龍山文化のあいだに、いろいろの文化層が發見されることは、その兩者の變化した過程を知るうえに重要である。まだこれで自生であるとか、よそから影響されたとかいう判定はつかないけれども、だんだん、そういう結論にちかづく期待が大きくなる。

鄭州の龍山と仰韶 鄭州の龍山文化は鼎、罍、鬲、甗、盃、單耳罐、深腹罐、豆、鉢、直壁杯、器蓋、紡輪、陶釧があり、繩席文、條籃文、格子文があり、磨光も一般的である。黒色亮光のもの、灰色薄胎の卵殻土器がある。石器は鏟あり、斧

あり、單孔また雙孔の刀がある。それに骨鏃と骨錐がある。

鄭州の仰韶文化では、林山砦で四十八の袋狀灰坑が発見され、たいてい上徑約1m、底徑約2m、ふかさ1・5mである。そのうちの一個からは黍と粟がみいだされた。窖址もある。砂質の鼎、罐、碗あり、泥質の鉢、罐、豆、紡輪、陶釧がある。彩陶は黒、紫、紅の三色でえがくが、白色のスリップはただ二片のみ。しかも亮光薄胎の卵殼土器があり、もとより黒色であるが、紅色もあり、これらはみな直壁杯だという。これは洛陽瀾瀾の灰坑 H5 とおなじ現象である。あるいは黒陶發生の事情をしめすものではなからうか。おなじ鄭州でも白莊の表面採集では白色スリップのものが多く、時期の相違をあらわしているという。

註(1)山西省文物管理委员会「晋南五縣古代人類文化遺址初步調查簡報」(文物參考資料、一九五六ノ九)、五三一五六頁。

(2)佟柱臣、前引書、九頁。

(3)楊富斗、趙岐「山西祁縣梁村仰韶文化遺址調查簡報」(考古通訊、一九五六ノ二)、四一頁以下。

(4)劉權「山西壺關文物普查組發現古遺址三處」(考古通訊、一九五七ノ二)、五一、五二頁。

(5)李健永、裴琪、賈峨「洛寧縣洛河兩岸古遺址調查簡報」(考古通訊、一九五六ノ二)、五一頁以下。

(6)尹達、前引書、八九頁。周到「河南浚縣新石器時代遺址」(考古通訊、一九五七ノ二)、一一—一三頁。

(7)孟昭林「河北正定縣南陽莊臥龍岡彩陶文化遺址」(文物參考資料、一九五五ノ一一)、七三頁以下。

(8)趙印堂、楊劍豪「曲陽縣附近新發見古文化遺址」(考古通訊、一九五五ノ一)、四五頁以下。

董增凱、孟昭林「河北省曲陽縣發現彩陶遺址」(文物參考資料、一九五五ノ二)、一一九、一二〇頁。

(9)佟柱臣、前引書七八頁。河北省文化局文物發掘組「河北省幾年來發見的考古資料」(文物參考資料、一九五六ノ七)、一五一—一七頁。

(10)李景昤「豫東南邱永城調查及造律台黑孤堆曹橋三處小發掘」(考古學報、二)、一九四八年刊。

(11)郭寶鈞等「洛陽瀾瀾古文化遺址及漢墓」(考古學報、一九五六ノ一)、一一頁以下。

(12)洛陽文化工作第二隊「洛陽瀾瀾西孫旗屯古遺址」(文物參考資料、一九五五ノ九)、五八頁以下。

(13)佟柱臣、前引書、一三頁。

(14)鄭衡「試論鄭州新發見的殷商文化遺址」(考古學報、一九五六ノ三)、七七頁以下。河南省文物工作隊第一隊「鄭州商代遺址的發掘」(考古學報、一九五七ノ二)、五三頁以下。

七 江淮の龍山文化

山東の龍山文化 河南省における龍山文化と仰韶文化との前後關係は、層位的にたしかめられている。しかし、山東においては仰韶文化の遺跡が発見されていないから、この龍山文化のふるさは層位的に實證できない。遺跡は龍山の名が由來した歷城縣龍山鎮城子崖をはじめとして日照兩城鎮⁽¹⁾、青島嶗山⁽²⁾、禹城周尹莊、卽墨姜家泊、滕縣宮內庄、岡上、安上村、鄒縣七女城、歷城大辛莊、臨城鳳凰臺等、みな龍山文化の遺跡である。このうち禹城周尹莊、滕縣宮家莊、鄒縣七女城、歷城大辛莊は、みな龍山文化層のうえに殷代文化層があるから、山東における龍山文化を殷代以後とする説は成立しがたい。

滕縣岡上 ところが、これら龍山文化の遺跡のうち、滕縣岡上村の遺跡からは彩陶が出土している。滕縣は山東省の南部にあり、むしろ淮河流域といつてよい地勢にあるが、岡上遺跡は沙河の西岸にあり、東西五百mにおよぶ大遺跡である。包含層はすこぶる遺物ゆたかで、下層に石器と黑陶片、黄陶片があり、みな泥質で磨光がある。上層は灰陶片と獸骨で、灰陶には繩席文罐、鬲、尊などがあつて、おのずから殷周文化であることがわかる。彩陶碗破片四個が採集されたが、それは河岸の砂原においてであつた。しかし、下層には同質の紅陶をみるから、彩陶はこの下層の龍山文化層に屬すると推定されている⁽³⁾。紅色のスリップがあり、黒と紫とで、かんたんな平行線と三角形があらわされている。

青蓮岡 これに似た遺跡は江蘇省淮安青蓮岡にある⁽⁴⁾。淮安縣というが、漣水縣にちかい廢黃河の南にある丘である。泥質と砂質の土器よりなり、紅、紅灰、灰色を主とするが、黑陶も少々ある。紅色のスリップはさかんにつかわれている。小壺あり、碗鉢も多い。そのうちには末期の仰韶碗に似たまるいものもある。圈足もあり、三足もある。豆や甑もある。注口の小壺にはめずらしい。彩陶の文様は黒色でえがき、かんたんな直線をまじえたものである。どうしたわけか繩席文、

格子文、條籃文がない。陶釧あり、陶製當板もある。石器はすくないが、大孔の扁平石斧があり、石斧、石鏃、礪石をみる。

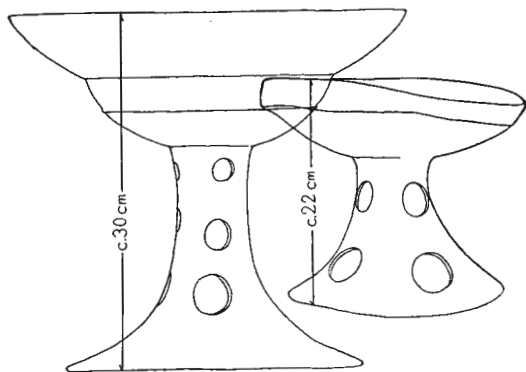
信陽

さらにここから西方にゆき、淮水の本流をさかのぼつて大別山の北麓にいたると、河南省信陽縣の三里店と陽山に彩陶を出土した遺跡がある。^[7]三里店の鮑家山は上層に石斧、網錘、繩席文陶甬、圓底器、黑灰素文豆、簋などがあり、下層は黑灰素文陶と彩陶があり、鼎がある。條籃文、繩席文があり、陶釧がある。下層は彩陶、黑灰陶があり、鼎があるといえ、洛陽附近の仰韶文化のようであるが、その黑灰陶はもと龍山的なものであらう。三里店の北丘は鼎があつて甬がなく、鮑家山の下層に似る。ただし、上下の二層あり、上層は黑陶、下層は彩陶という。報告のうえだけで判断すれば左のごとくなり、(1)は仰韶、(2)はその晩期、(3)は龍山で、(4)は殷周期にあたるようである。

- (1)北丘下層——(2)鮑家山下層——(3)北丘上層——(4)鮑家山上層
彩陶——彩陶、黑灰陶——黑陶——灰黑陶

(鼎)——(鼎)——(甬)

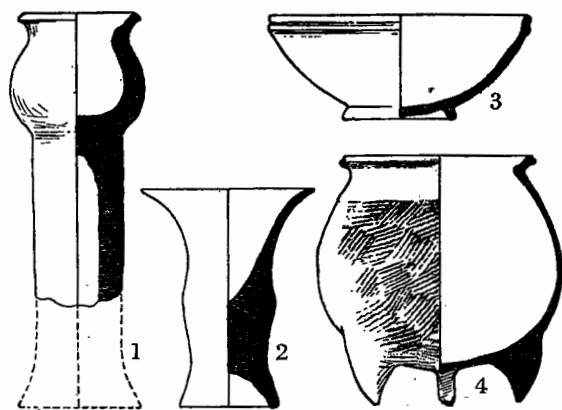
しかし、信陽北部にある陽山では彩陶と黑陶とがいつしよに出土した。^[8]黑陶は輪製で、卵殻のものがあつた。平底碗、圈底碗、特殊な高足壺、高足鏤空豆、觚形杯(第三圖)、器蓋あり、條籃文、繩席文あり、紡輪がある。石器は石斧、石刀、磨石鏃も出土している。すなわち、ここにも鼎があつて甬がない。(1)——(3)層にあたるが、その基本は龍山文化にあることがあきらかで、それに彩陶がともなつてゐるかつこうである。その點、淮安青蓮岡、滕縣岡上に似た遺跡である。しかもここからでた特殊な高足壺は湖北省天門石家河に似ているが、石家河もまた、揚子江流域の彩陶をとまなう遺跡である。



第一二圖 洛陽孫旗屯豆略圖
(洛陽 河南省博物館籌備處)

が、前者では銅刀子があり、雙翼銅鏃があり、石併用時代で、殷、西周にあたるといわれている。

屈家嶺と石家河 ここから揚子江をさかのぼつて漢水流域にでると、湖北省京山屈家嶺と天門石家河の遺跡がある。¹⁰⁴ 屈家嶺の彩陶には扁壺、鼎足、杯、器蓋があり、紡輪もある。なかに卵殻彩陶とよばれる、うすい彩陶片(第一六圖)がある。たいてい杯の破片であるらしい。あつさ1mm内外、輪製である。泥質で、灰白から紅色のあいだにあり、黒、黄、紅のスリップをかけ、そのうえに黒、紅二色で彩色する。共存遺物としては卵殻黒陶あり、また黒陶圈足小碗、楕圓形小杯あり、

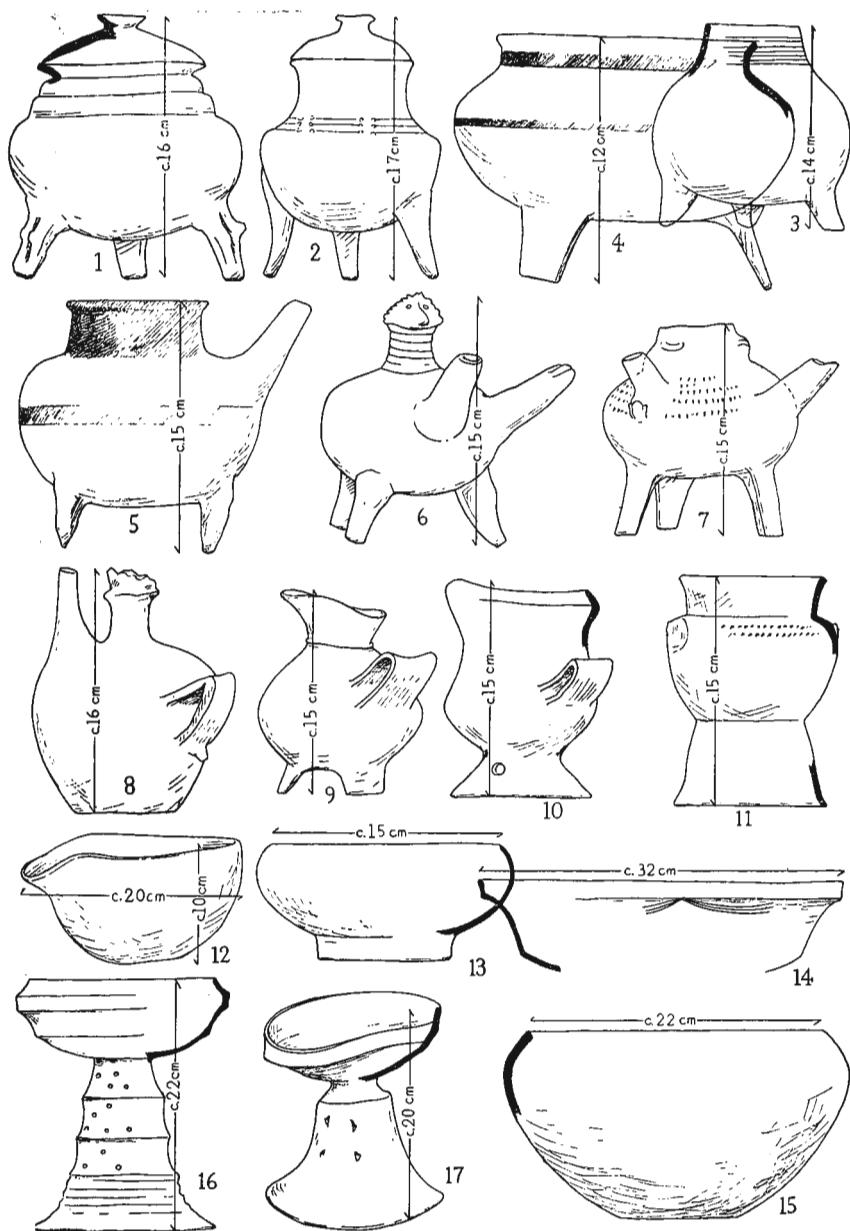


第一三圖 信陽陽山土器圖

(文物參考資料, 1955-8)

陰陽營 つぎに淮河域をはなれて揚子江畔にでると、南京陰陽營の遺跡¹⁰⁵が彩陶をだす。青蓮岡に似た彩陶のはかに丹彩の土器(第一四圖)もあり、花廳同様の罍がある。それからひくい罍、三足の注口小壺、扁足の鼎、繩席文の鉢、黒陶の鏤空豆がある。だいたい泥質だが、砂質もある。黒灰色、紅色を主とする。大孔の扁平石斧は淮安青蓮岡におなじく、大形の方柱狀石斧、小形の石鑿、半月形雙孔石刀、それから球狀耳飾、玉環、玉璜などの裝飾具が多いが、これらはみな杭縣老和山、旅順四平山に似て、龍山文化的である。長方形の堅穴住居や墓葬がみられるが、そのうちには俯身葬がある。

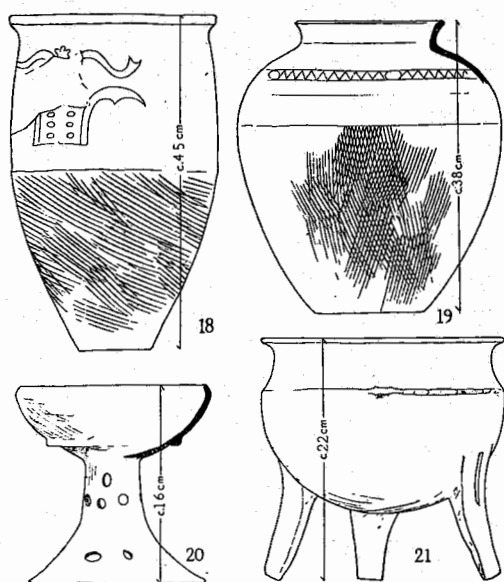
以上はみな下層文化であるが、上層文化(第一五圖)も細繩文のある黒陶にちかい壺、刻文、印文のある甕、黒褐陶の鼎、鏤空の豆などがあり、あまりはなれた時期とおもえない。しかし、南京博物院の調査によると、軟質印文陶と微量の硬質印文陶があり、印文には雷文があるとともに銅鏃があり、また銅滓があつたという。だいたい南京鎮金村、¹⁰⁶ 丹徒大港の遺跡¹⁰⁷に一致する



第一四圖

南京陰陽營下層土器略圖

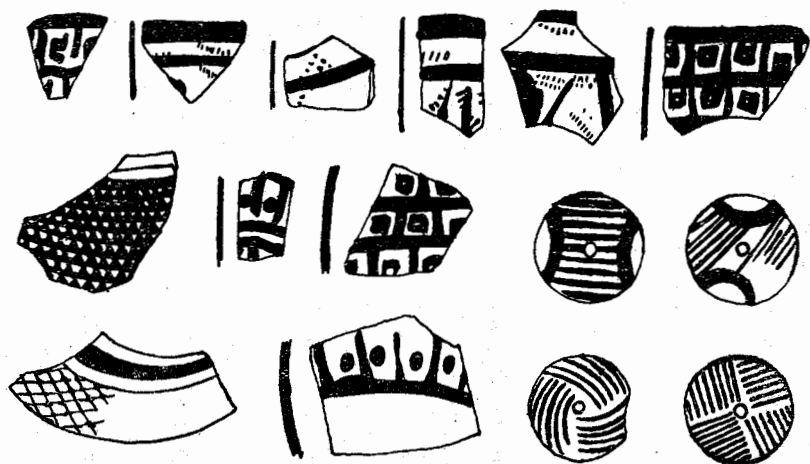
(南京博物院)



第一五圖 南京陰陽營下層土器略圖
(南京博物院)

紅陶の小土偶がある。ことに鏤空豆、三足碗、甑があるので龍山文化であることはあきらかである。ただし、卵殻彩陶は鄭州林山砦の仰韶文化に似ているという。

石家河からは彩文の紡輪(第一六圖)がでている。泥質黄陶で、かんたんな直線文と弧線文の彩色がある。彩陶の器形は杯が多く、あつさは二・五〇〜五mmの間、黄胎に紅色の彩色がある。そのほか、



第一六圖 屈家嶺彩陶・石家河紡輪圖

(考古通訊, 1956—3)

黒、灰、紅、黄の土器がある。器形は罍、圈足の盃、圈足の豆、圈足の杯、高足の碗、高足の皿など。それに玩具のような鳥や獣の土製品が多い。石器は大孔石斧、ただの石斧、柱状石斧、磨石鏃が多い。著者たちの分析によれば、地層は第一に玉と銅器の層、第二に窖址の層、第三に彩、紅、黒、灰陶の層があるという。第一はあきらかに殷周の玉器で、第三は龍山文化を基調にしたものである。

さて、以上の滕縣岡上、淮安青蓮岡、南京陰陽營、信陽三里店と陽山、京山屈家嶺と天門石家河の諸遺跡は彩陶をともなっているが、その彩陶はよほどの變種である。のみならず、遺跡の基本的様相は龍山文化である。ところが、この江淮から漢水にかけた地域は、この種の龍山文化がそうとう濃密に分布している。最近知られたものだけでも、かなりの遺跡數にのぼる。そのうち重要な遺跡として江蘇省新沂花廳、安徽省壽縣魏家郢、嘉山泊岡、浙江省杭縣良渚と老和山があげられる。これらは、もちろん彩陶をみないが、新沂花廳などの灰陶にみる紅色のスリップは仰韶文化の傳統とみてよいであらう。

花廳 花廳遺跡⁽¹⁾は徐莊、北溝圈の住地と徐莊一帯の葬地とよりなる。墓葬は二十例ばかりある。副葬品はゆたかで興味をひくが、いまは便にしたがい省略する。ここから出土する土器は、たいてい泥質陶である。(1)三足器はみな實足、つまり鼎で、高はない。罍はある。三脚の鉢はある。南京陰陽營のものによく似ている。(2)圈足器は壺があり、把手の杯があり、豆があり、鉢がある。兩耳の壺は杭縣良渚、嘉興双橋のものによく似ているが、鏤孔の豆は不召棗以下の豆によく似ている。(3)平底器としては鉢と罐とがあり、罐には把手つきのものがあり、陰陽營下層に似る。紅色のスリップがある。石器は有孔石斧がいちじるしいほか、有段石斧、玉劍、玉環、小玉類が注意される。骨角器は錐、縫針、鏃、鋸、環等がつくられている。

壽縣の近傍 一九三四年、王湘氏は壽縣周邊の十二遺跡を調査した。魏家郢、彭家郢などの臺形遺跡で、貝殻が多い。發掘しなかつたため層序關係はつまびらかでないが、罍、甗、鼎、三脚の碗、鬼臉脚があり、方格文、條籃文がある。こ

れらにはあきらかに龍山文化であるが、これとともに鬲、豆、繩紋文の殷文化があり、この地に龍山文化と殷文化の繼起したことがあきらかにされた。

この調査のときには、また純粹な薄胎の黒陶はないといわれていたが、最近、安徽省博物館の調査⁽¹⁰⁾するところでは、一般に、貝鎌、貝鋸、貝刀があり、陶鬲、石鎌、扁平大孔石斧があり、白灰面の床があつて、龍山の色彩がつよいえに、毫縣釣魚臺からは標準的な黒陶が出土したという。

良渚鎮 杭縣良渚については、はやくから知られていたが、一九五五年にあたらしい遺跡⁽¹¹⁾が発見され、調査された。それによると、良渚の遺跡はひじょうに廣大で、東は良渚鎮より西は黃泥壩にいたる六kmの地にわたつてゐる。發掘地點は(1)地表から〇・五mが表土で、印文陶その他がでる。(2)〇・五—一・五mのあいだは黒陶があり、三足器があり、石斧、石刀、石鏃、石錘等がある。(3)一・五—三mの間にも黒陶あり、鏤空の黒陶あり、石器はほぼ似てゐる。黒陶は黒、灰、橙黃、赭紅といろいろの色彩を有し、手製、輪製で精良である。薄胎黒陶よりも黒皮黒陶である。器形はとくに環耳壺、簋、鏤空豆はみごとである。石器はみごとな扁平大孔石斧があり、石鏃があり、鉞形石斧があり、磨石鏃がある。玉環、玉璜など玉製品のものも、龍山文化の一樣相である。

老和山 この遺跡⁽¹²⁾はもと古蕩とよばれたが、老和山という方がただし。一九五三年、浙江大學建設にともなつて調査された。それによると、包含層からは泥質陶がでる。黒色から灰色におよび、黒皮灰胎のものもでる。泥質紅陶もあるが、砂質の紅陶、灰陶もあり、ぜんたいからいうと黒陶よりも紅陶の方が多い。實心の三足器が多く、うつくしい黒陶の豆があり、環耳壺があり、鉢型の簋があり、把つきの杯がある。大孔の扁平斧、石斧、石鏃、石鑿、雙孔長方形石刀、石鎌、石鏃、石錘、紡輪、網錘がある。のみならず注意すべきは有肩石斧、有段石斧の存在であるが、層位は不明である。

第一、第二の周圍 こういう状態からみると、江淮漢の流域に仰韶文化がはいつたことはたしかである。しかし、それは仰韶文化の末期であつたのか、あまり壓倒的ではなかつたし、あまり濃密な分布もしなかつた。ただ、中原文化の周圍

に山東、江蘇、安徽、湖北とひろく、かつ福建、臺灣とのおくまでひろがつた。とにかく、それは龍山文化が基礎になつて、彩陶をともなつた文化であつた。ここでは黒光のある薄胎黒陶はすくない。かえつて黒灰陶であり、黒皮陶であり、あるいは紅陶や灰黒陶が主となつてゐる。安徽省の壽縣までは白灰面の住居をもちこんだが、それから南はどうであつたかわからない。ただ、いわゆる臺形遺跡の多いことは、今日のことき水田のなかの生活が想像される。イネ、ムギをつつたこと、イヌ、ブタ、ヒツジ、ウシ、ウマをやしなつたこと、イノシシ、シカをとつたこと、鱈魚、青魚、草魚、スッポン、カメ、タニシ、ドブガイ、アサリをあつめたことは、遺物の證明するところである。

この廣大な地域に、濃密な分布をもつ龍山文化は、さすがに變化が多く、多くの地域、多くの時期にわけてかんがえる必要が痛感される。だが、そのことは將來のことである。いまは、かんたんな展望で満足するよりしかたがない。まず黃河中原を直接にとりまく第一周圈、山東の西部、それから淮河の流域、そしておそらく漢水流域は、繩蓆文、方格文、條紋文が發達している。ところが、このそとにある第二の周圈、山東の東部、江浙地方から江西、湖南には繩蓆文、方格文、條紋文が發達しない。それだけ非中原的なであらう。そうして、この直接する第一周圈には、その繩蓆文をうけついだ殷周文化があらわれた。これも、もとより中原からの波及であるが、第二の周圈である山東東部、江浙では、この文化はあまり顯著でない。そうして、とくに揚子江域とその以南では、あらたな印文陶文化が興隆したのである。

註(1)山東省文物管理處「日照兩城鎮等七個遺址初步勘査」(文物參考

資料、一九五五ノ一二)、二〇—四一頁。

(2)王子先「青島嶗山發現新石器時代的石器」(考古通訊、一九五五ノ五)、五六、五七頁。

(3)「山東禹城發現新石器時代古文化遺址」(文物參考資料、一九五四—三)、七頁。

(4)尹煥章「華東新石器時代遺址」、上海一九五五年刊、七一—一六頁。

(5)尹煥章、前引書、一四、一五頁。佟柱臣、前引書、一六頁。

安志敏「一九五三年我國考古的新發現」(考古通訊、一九五五ノ一)、四八頁。

(6)華東文化工作隊「淮安縣青蓮岡新石器時代遺址調查報告」(考古學報、九、一九五五年刊、一三—二四頁)。

(7)佟柱臣、前引書、一三、一四頁。

(8)「河南信陽三里店古文化遺址」(文物參考資料、一九五四ノ六)、

二五—三一頁。

(9) 河南文物工作隊「河南信陽市陽山新石器時代遺址試掘記」(文物參考資料、一九五五ノ八)、五九—六七頁。

(10) 尹煥章、前引書、三二、三三頁。王志敏「南京城內發現新石器時代遺址」(文物參考資料、一九五四ノ一〇、一三七頁)。

尹煥章「南京城內陰陽營發現的新石器時代遺址勘查情況」(文物參考資料、一九五五ノ一)、一二八頁。

(11) 修柱臣、前引書、一七頁による。同書には南京博物院江蘇文管會「東南地區印文硬陶的初步推測」(未刊稿)を引用している。

(12) 李鑑昭「南京鎮金村發現的新石器時代遺址」(考古通訊、一九五六ノ四)、三三頁。

(13) 茅貞「丹徒發現新石器時代遺址」(考古通訊、一九五五ノ四)、六一頁。茅貞「值得重視的丹徒地下室藏」(考古通訊、一九五七ノ二)、五〇頁。

(14) 王勁、吳瑞生、譚維四「湖北京山縣石龍過江水庫工程中發現的新石器時代遺址簡報」(文物參考資料、一九五五ノ四)、四一—四五頁。

石龍過江水庫文物工作隊「湖北京山縣石龍過江水庫工程發掘簡報」(考古通訊、一九五六ノ三)、一一—一二頁。

程欣人「京山縣屈家嶺遺址繼續發現重要遺物」(文物參考資料、一九五六ノ一〇)、八〇頁。

(15) この窖址の層および構造は理解しがたい。この發掘に對し、張雲鵬「由湖北石家河遺址發掘方法的主要錯誤談學蘇聯先進經驗」

(考古通訊、一九五七ノ二)、六八—七三頁という批判もある。

(16) 修柱臣、前引書、一六頁。

(17) 南京博物院「新沂花廳村新石器時代遺址概況」(文物參考資料、一九五六ノ七二)、三一—二六頁。

(18) 王湘「安徽壽縣史前遺址調查報告」(考古學報、二)、一九四七年刊、一七九—二五〇頁。

(19) 安徽博物院「安徽新石器時代遺址的調查」(考古學報、一九五七ノ一)、二一—三五頁。

(20) 浙江文管會「良渚黑陶又一次重要發現」(文物參考資料、一九五六ノ二)、二五—二八頁。

汪濟英、黨華「良渚長坎黑陶遺址清理工作概況」(文物參考資料、一九五六ノ三)、八四頁。

(21) 黨華「二年來浙江發現的新石器時代遺址與遺物」(文物參考資料、一九五五ノ八)。華東文物工作隊「四年來華東區文物工作及其重要的發現」(文物參考資料一九五四ノ八)。

(22) 安徽省博物館「安徽新石器時代遺址的調查」(考古學報、一九五七ノ一)、二六、二七頁。

馮信教「浙江崇德羅家古遺址調查記」(考古通訊、一九五七ノ四)、四九頁。

劉憲亨「湖北宜昌享家河新石器時代遺址中的魚骨」(考古通訊、一九五七ノ三)、七八頁。

胡悅謙「安徽靈璧縣莊廟村新石器時代遺址調查報告」(考古通訊、一九五五ノ五)、一六頁。

八 江南の印文陶文化

印文陶の層位 杭縣老和山、良渚の遺跡では、上層の耕土から印文陶がでるといつたが、このことは嘉興双橋⁽¹⁾においても認められ、崇德州泉鎮の北道橋⁽²⁾においては、もつと明瞭な層位となつてあらわれている。すなわち第一層の耕土をのぞき、第二層が印文陶、第三層が黒灰陶、紅陶、石器を包含する。石器は石刀、石矛、石鏃、紡輪、土器は繩蓆文砂質の紅陶鼎、砂質の紅陶罐、黒陶簋、それにシカ、ヒツジ、ノロの骨や角があつて、まさしく龍山系の文化である。

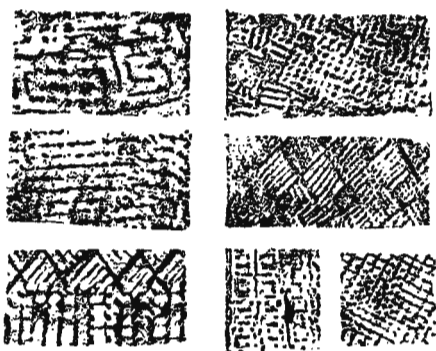
王志敏氏の「江蘇省南部新石器時代文化」（考古通訊、一九五五ノ一、三二、三三頁）によると、浙江省に接した金山縣金山衛には下層龍山系文化、上層印文陶文化がある。また常州湘塘橋は黒陶の龍山系文化のみで、印文陶はないし、吳縣陽山、蘇州五峯山、溧陽國營農場は印文陶だけで、黒陶系の遺物はないという。しかも、この印文陶だけの三遺跡にも、みな石斧乃至肩石斧をみる。尹煥章氏は、印文陶と青銅器のある南京陰陽營の上層を金石併用期と規定している。中原の殷周文化であり、甘肅の辛店文化に相當する。

印文陶の分布 ところが、この印文陶の分布はいたつて特徴的である。つまり揚子江の兩岸から以南で、浙江、江西、湖南から福建、廣東におよんでいる。江蘇省でも江南は濃厚な分布をしめすが、江北は揚州あたりまでで、淮河の流域におよんでいない。淮安青蓮岡、新沂花廳にはみられない。安徽省でも北はだいたい合肥までで、淮河流域の嘉山泊岡や壽縣の各遺跡にはみあたらない。⁽³⁾湖北省では圻春縣の各地、漢口戴家山⁽⁴⁾にはあるが、黃石市の各地⁽⁵⁾にはない。天門石家河には記述がなく、京山屈家嶺にはあるが、あまり顯著ではないらしい。⁽⁶⁾さらに揚子江をさかのぼつて宜昌李家河⁽⁷⁾にいたると、龍山系の遺物は知られているが、印文陶に關する報告はない。

軟陶と硬陶 印文陶は印文軟陶と硬陶とがある。揚子江下流において報告されているのは、ほとんど印文硬陶である。印文軟陶については、ただ蘇北治淮文物工作組の「江蘇揚州附近鳳凰河遺址發掘簡報」（考古通訊、一九五七ノ一）に記述が

に多いことをのべているが、そこにあげた印文は、偶然か揚州鳳凰河の泥質紅陶、すなわち印文軟陶(第一七圖)のものに似ている。浙江省の崇德州景北道橋や双橋の印文(第一八圖)は、さきに引用した黨華氏の報告中にたくさん圖示されているが、それはほとんど印文硬陶らしい。しかし、べつに附近出土の泥質灰陶の印文には銅器にみるような虺龍文があるという。茅貞「丹徒又發現古遺址」(考古通訊、一九五六ノ一、三五頁)にも、饕餮文の陶片を報告している。

印文陶の年代 魏百齡氏の「江蘇丹徒獺龜墩發現新石器時代遺址」(考古通訊、一九五六ノ六、五八頁)をみると、印文硬陶を二つにわけている。一種は印文があさく、火度がたかい。他は印文がふかく、火度がひくい。やわらかいうえに、銅器文様に似ている。後者はふるいが、

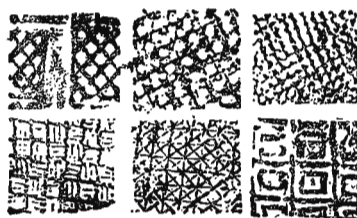


第一七圖 丹徒軟陶印文

(考古通訊, 1955—4)

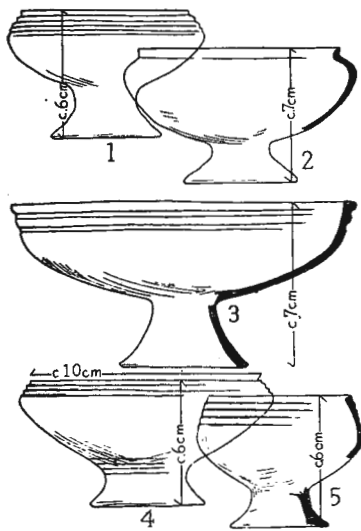
ある。ここは三層にわかれるが、(1)砂質粗陶、(2)泥質紅陶、(3)印文硬陶は各層から出土、(4)泥質灰陶と(5)泥質黑陶は最下層にのみでる。このうち泥質紅陶で、印文のあるものが印文軟陶である。してみると、兩方の印文陶が龍山系のもよりあたらしいということになるが、印文軟陶と硬陶との層位的區別はみとめられない。しかし、圖版に示された破片からみると、前者には格子文、網代文、雷文があり、後者には格子文、羽狀文、階段文、穀粒格子文、穀粒方格文ともいふべきものがある。印文のちがうところをみると、時期のちがう可能性もある。ここでは印文硬陶に比して軟陶が壓倒的に多い。

また茅貞「丹徒發現新石器時代文化遺址」(考古通訊、一九五五ノ四、六一頁)をみると、このあたりの砂質紅陶と灰陶に印文のあることをいい、前者の壓倒的



第一八圖 双橋硬陶印文

(考古通訊, 1955—5)



第一九圖 無錫榮巷豆略圖

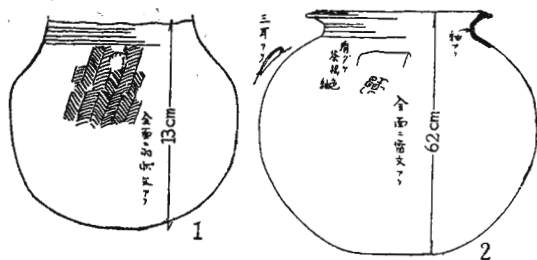
(蘇州 江蘇省博物館)

かつて無錫の戦國墓よりでたことがあるという。したがって、これによると印文硬陶のやわらかい方が戦國、かたい方が漢代ということになる。しかし、これは硬陶だけの細分である。さきの揚州鳳凰河の報告では、戦國墓の出土品とくらべて、軟陶、硬陶ともそれよりふるいといっている。また南京陰陽營の上層、丹徒大港の遺跡とくらべて、前者の銅鏃、後者の鬲から周の中期、もしくは早期とかんがえている。これに對し、さきにあげた南京博物館の諸學者の意見では、印文硬陶を春秋以後、印文軟陶を殷から西周にいたるとしている。

南京諸學者の意見は穩當だともう。江南における印文陶の傳統はひじょうによいから、戦國墓にも、漢墓にも印文陶のあることは事實である。けれども、これらは、もはや特殊な存在というべきであろう。戦國や漢代になつて、中原とかわらない墳墓が、このあたりにいとなまれること自體が、地方文化である印文陶の盛時がすでにすぎさつたことを意味するともう。だから、わたくしは春秋以後というより、春秋をふくめた春秋以後にその盛時をみとめたいとおもつてゐる。漢代の印文硬陶、戦國の印文硬陶はべつである。春秋時代(前七七一〇四〇三)、あるいは吳越時代(前四九五—三三四四)

に歸すべき印文硬陶を、ここでは問題にしたのである。したがつて、以前によばれていた「吳越文化」の稱も、なおすてがたい魅力があるとおもう。このことに關連して、最近の重要な事實は、印文陶の墳墓と窖址の發見であらう。

印文陶の墳墓 墳墓は蘇州五峯山と無錫嶂山、榮巷、塋門、藝圃において發見された。構造はかならずしも明瞭でないが、五峯山々下の一例、榮巷の一例は土坑であり、嶂山の一例は石槨である。石槨は東西になく三・八五m、南北〇・四五m、たかさ〇・四〇mという。北壁は五塊の石、南壁は六塊の石、



第二〇圖 鄭州殷代印文陶略圖

(鄭州河南文物工作隊第一隊)

東壁は亂石、西壁は一大石よりなる。石槨のなかから皿二、釉豆一、罐五がでたが、罐は印文硬陶であつた。その他の墓葬も、たいていこの程度の副葬品があつた。土器は紫黑色を主とし、灰色また紅色をおびるものがすこしある。土は精良であるが、こまかい砂粒をふくむ。焼成火度たかく、硬陶の名にふさわしくかたい。釉は青褐色でうすく、豆のほかに尊、杯、碗もみられる。

このうち特徴的なものは豆と尊である。この種の灰釉豆(第一九圖)は、長安普渡村、洛陽老城區¹⁰⁾や丹徒煙墩山の西周墓から出土している。西周というけれども、釉のないものなら、安陽小屯にもみられる。殷末以来のものといふべきであろう。しかし、この出土品は皿部がやや大きく、口がひらいたままになつているのが、すこしちがう。いくらかおくれたものとみるのが至當であらう。そうすれば西周後期か、東周前期といえよう。さきの年代觀ともあうわけである。

それから大腹、侈口、圈臺の尊は銅器の尊と共通したところがある。銅器の尊から派生したものとして西周ごろとみとめられる。これとちがつて、羽狀刻文の盒は晩周の盒に一致し、獸形の耳も戰國銅器の裝飾をおもわすものがある。華利齋古墓の報文(四八頁)では、浙江寧波の戰國墓からでた釉陶の提梁盃をあげているが、これはたぶん O. カールベック氏の *Early Yueh Ware (Oriental Art, II-1)* 第二二圖にみえる提梁盃と同類とおもう。もし、これが戰國時代とすると、ここにあげたものは、つくりから、釉から、それよりも幼稚であるから、それよりはふるいといふことができる。

印文陶の窖址 窖址は浙江省蕭山縣茅里灣、唐子山、馬面山の三カ所において發見された。¹⁰⁾ 窖の構造はわからない。しかし、焼きそこないや釉塊のからがいつはいある

から窖址であることはまちがいない。土器は(1)印文硬陶、(2)釉陶、(3)泥質陶、(4)砂質陶である。印文は方格文、市松文、米字文、蒲席文等あり、釉陶は黄味がかった青色の灰釉がうすくかかっている。泥陶は粗鬆で、黄色と灰色を呈し、印文はない。砂質陶は紅色と灰色で、扁平な鼎足ばかりである。時代については言及していないが、蘇州、無錫の墓葬と同時代とみてよい。ことに、うすい灰釉のかかった椀(盃)はまったく同様なものが双方にある。この灰釉盃は、よく似たものが廣東省からもでていて注意をひく。

印文陶の源流 こういうふうな印文硬陶をかんがえると、印文軟陶は西周、また殷にさかのぼることも可能になる。ただ印文硬陶と軟陶の區別は胎についてみればあきらかであつても、印文だけでは區別しにくい。雷文、羽狀文、網代文などのふるく、米字文、複合文などのあたらしいのは、ほほいえるとしても、そのほかは截然と區別しがたいとおもう。しかし、とにかく印文硬陶にさきだつて一定の流行の時期があつたことはひとめてよい。印文陶のはじまりを、殷までひきあげるによつて、その印文の出自があきらかになるようにおもう。殷まであげると、江域の印文陶が殷文化の影響になることが可能になつてくる。近時發掘の鄭州では、殷代、とくに二里岡期の印文がゆたかなことがわかつている。とくに、その羽狀印文を全面にほどこした紅褐色の小壺(盃)、雷文を全面にした釉陶壺(第二〇圖)は印文陶の源流とするにふさわしい。もともと龍山文化における繩席文、條籃文、方格文は印文とおなじ手法である。けれども、江浙の龍山遺跡には繩席文も、條籃文も、方格文もすべてなくなつていた。あたらしい印文陶は殷文化との接觸によつてはじまり、ついで周文化との接觸によつて釉陶をいれたのではなからうか。要するに江域における印文陶文化は中原の殷周文化に相當し、その影響を多分にうけ、ついに完全に中原化されたのが戰國時代というわけであらう。(第二一圖)

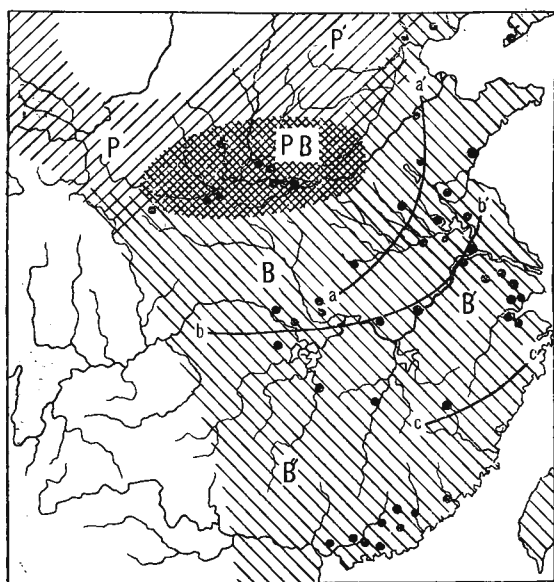
註(1)黨華「浙江嘉興双橋發現新石器時代遺址」(考古通訊、一九五五

年ノ五)、二二—二五頁。

(2)黨華「二年來浙江發現的新石器時代遺址與遺物」(文物參考資料、

一九五五ノ八)、七四頁。

(3)安徽省博物館「安徽新石器時代遺址的調查」(考古學報、一九五七ノ一)、二二—三〇頁。



第二一圖 中國先史文化圖

(4) 湖北省文物管理委員會「湖北圻春易家山新石器時代遺址調查簡報」(考古通訊、一九五六ノ三)、二四頁。

藍蔚「略談三年來武漢市的文物保護發現」(文物參考資料、一九五六ノ七)、一七、一八頁。

(5) 高應勳、周抱權「湖北黃石市六處古遺址調查紀要」(文物參考資料、一九五六—一二)、四九—五二頁。

(6) 王勁、吳瑞生、譚維四「湖北京山縣石龍過江水庫工程中發現的新石器時代遺址簡報」(文物參考資料、一九五五ノ四)、四二—

四六頁に印文陶のことをいうが、そのほかにはみない。

(7) 黃萬波「湖北宜昌的新石器時代遺址」(考古通訊、一九五七ノ三)、五七—六〇頁。

(8) 前引の「鳳凰河遺址」、一七頁。

(9) 紹興離渚、湖南長沙。

(10) 朱江「吳縣五峰山烽燧墩清理簡報」(考古通訊、一九五五ノ四)、五〇—五三頁。

朱江「江蘇南部「硬陶與釉陶」遺存清理」(考古通訊、一九五七ノ三)、八一—八三頁。

魏百齡、謝春祝「無錫華利灣古墓清理簡報」(文物參考資料、一九五六ノ一二)、四七、四八頁。

(11) 陝西省文管會「長安普渡村西周墓的發掘」(考古通訊、一九五七ノ一)、圖版五一。『洛陽出土文物選集』第一輯、一四頁。

(12) 江蘇省文管會「江蘇丹徒縣址山出土的古代青銅器」(文物參考資料、一九五五ノ五)、五八頁。

(13) 鄒衡「試論鄭州殷周文化遺址」(前引)、圖四。

(14) 王士倫「浙江蕭山進化區古代窖址的發現」(考古通訊、一九五七ノ二)、二四—二九頁。

(15) 『世界陶磁全集』第八卷、第三一七圖。

(16) 安金槐「鄭州古代遺存介紹」(前引)、一九頁。

〔後記〕 なおわたくしは贛湘の印文陶、閩粵の印文陶について書くつもりであつたが、紙數も倍以上になつたし期限もきれたので、いちおうこれで擱筆するが、廣東のことについては『中國考古學の旅』(近刊)のなかで、すこしふれてある。(一九五七、九、二三)

(一〇八頁へ)

(三九頁より)

〔中國先史文化圖の説明〕　　こういう圖をつくつてみると、BP區は仰韶層、龍山層と殷周層との上下關係がみられる地帶。P區は仰韶層、齊家層と辛店層とが上下關係をなし、P'區は仰韶層（赤峰第一）と辛店層（赤峰第二）とがみとめられる地帶。南のB區は龍山、もしくは龍山系の文化のおよぶ地帶。ただし、a a'線までは繩蓆文が顯著で、殷周繩蓆文灰陶も豊富。b b'線は印文陶の發達をみず、線内のB'區は龍山系文化層と印文陶文化層とが上下關係にある。これに反しB''區はまだ兩者の層序關係が不明である。

(一九五七、一〇、七)

Prehistoric Studies in China

Seiichi Mizuno

After the Revolution prehistoric study in China has made a remarkable progress. As the result of archeological researches made in the course of the construction of the Huang-ho 黃河 dams Sha-yüan 沙苑 culture microliths, which preceded the Yang-shao 仰韶 culture, have been discovered at Ch'ao-i 朝邑, Shensi 陝西. These microliths belong to the hunting stage before the introduction of agriculture. Sites of the Yang-shao and Lung-shan 龍山 cultures have been found with rich artifacts. If we compare these findings with those from the Yang-shao site at Pan-p'o 半坡 in Shensi Province, it seems that Yang-shao culture in Honan 河南 and Shensi gave birth to Yang-shao culture at large, and the same may be said of the later cultures of Lung-shan as well as of Yin 殷 and Chou 周. In Kansu 甘肅 too the dam construction has led to a number discoveries of various sites, where the chronological order of the Yang-shao, Ch'i-chia 齊家 and Hsin-tien 辛店 cultures, which correspond to that of Yang-shao, Lung-shan and Yin-Chou cultures, can be observed. Though these three distinct cultures were successively diffused to Kiangsu 江蘇, Anhui 安徽 and Hupei 湖北, it was the modified Lung-shan culture that played the leading role. Still later, the diffusion of Lung-shan culture to the south of the Yang-tzu gave birth to impressed pottery culture which corresponds to Yin-Chou culture.

On the Newly Discovered Chinese Bronzes

Takayasu Higuchi

It is a noteworthy fact that those bronzes which have been discovered after the Revolution are the result of systematic excavations and, consequently, their sites are known. In the present article are taken up those bronzes from the Western Chou 周 sites at Tan-t'u 丹徒 Hsien and I-chêng 儀徵 in Kiangsu 江蘇 Province, at Liang-yuan 凌源 Hsien in Liao-ning 遼寧 Province, at Hung-chao 洪趙 in Shan-si 山西 Province, and at Ch'ang-an 長安 and Méi 眉 Hsien in Shensi 陝西 Province. All these sites were in the cultural area of Western Chou, while at that time the other parts of China still remained in the stone age. This area may be divided into four distinct sub-areas. It might be, therefore, supposed that each of them reveals its own local characteristics, but, in fact, all of them are so closely related with the bronzes from Lo-yang 洛陽 and Shantung 山東 that little local difference is observed. At some of these sites bronzes of different dates

圖版第一 先史土器

①



②



③



④



⑤



湖北省天門縣石家河出土

湖北省博物館